



HAL
open science

精細化 (l'explicitation) の具体的な方法について

Hervé Breton

► To cite this version:

Hervé Breton. 精細化 (l'explicitation) の具体的な方法について. 若者が自分のライフストーリーを語る意味, Minatogawa University, Kobe, Japan, Feb 2018, Kobe, Japan. <hal-03745241>

HAL Id: hal-03745241

<https://hal.science/hal-03745241>

Submitted on 4 Aug 2022

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.



Distributed under a Creative Commons Attribution - NonCommercial - NoDerivatives 4.0 International License

第4回湊川短期大学キャリア教育国際セミナー

「若者が自分のライフストーリーを語る意味」

2018年2月3日（土） 10:00～16:00

湊川短期大学本館 205A 教室



〈主催〉湊川短期大学

〈共催〉三田松聖高等学校

<日程>

(午前)

- 趣旨説明: 末本 誠(湊川短期大学長)
- 報告 1:「若者が自分のライフストーリーを語る意味」
エルベ・ブルトン (フランス・トゥール大学准教授 Ashivif
(国際ライフストーリー教育研究会)会長)
- 報告 2:「関西外国語大学での試み」

川崎孝生(関西外国語大学短期大学部教授)

(午後)

- 実践指導:「記憶を詳細に呼び戻す(explicitation)の実際」
エルベ・ブルトン
- 講評: 森岡正芳(立命館大学教授)



エルヴェ・ブルトン(Hervé Breton)

トゥール大学教育科学部教育訓練学科准教授。専門は成人教育・ナラティブ療法における伝記的手法の研究、経験学習・健康教育 著書:『労働者の国家間移動と資格制度』



川崎孝生(かわさきたかお)

神戸製鋼就職後、外資系企業で人事を担当 現在は関西外国語大学で大学評価・IR を担当の他、短期大学部で経営学・キャリア教育で課題解決型授業を展開

若者が人生を語ること

湊川短期大学 学長 末本 誠

湊川短期大学では、国内外のゲストを招いて大学・高校での教育およびキャリア教育に、ライフストーリーを導入することを目的としたセミナーを、これまで3回にわたって開催してきた。4回目の今回は、フランスからトゥール大学のエルヴェ・ブルトンさんを招き、語り手の物語を成立させるための支援の方法である「精細化 (explicitation)」に関する指導をお願いする。合わせて日本からも、関西外国語大学での経営学に関する学生指導にライフストーリーを応用する試みを続けている、川崎孝生先生の実践報告をしていただく。

ライフストーリーは語り手が自分の人生を振り返り、聞き手に自分の経験を物語ることを通じて、自分が生きてきた人生の意味を再確認したり再構築したりするのを促す方法である。こうした気づきとしての教育の重要性は近年、おもに成人教育の領域で大人の学習の方法として注目され、実践されてきている。今回はそれを高校生や大学生を相手に実践する意味を考え、論議する。またそれに合わせて、「精細化」の具体的な実践のスキルについての指導も計画されている。

人生の経験について、多くの人は自分の経てきたことであるという理由から、当然すでに知っていると思っている。しかし多くの場合、記憶として残る経験は断片的であったり漠然とした印象であったりする。ライフストーリーは、その経験を言葉にして聞き手に伝えようとする。漠然とした記憶が言葉に置き換えられることと相手に伝えよう意識することが、伝えようとする出来事の細部をはっきりさせたり、何故それを伝えようとするのかを明示的にしたりという効果を生むのである。実際、語りを進めるうちに記憶の底に沈んでいた経験が次第に鮮明になり、言葉という形で自分が意識している自分を裏切っていくことが起きる。「ごく平凡な人生を送ってきた自分の人生などに、大した意味があるはずはない」と思い込んできた主婦が、自分の語った言葉の豊饒さに驚いて「自分もなかなかどうして、大したものだ」というような感想を漏らすようになるのは、珍しいことではない。

この方法を高校生や大学生に応用したら、何が起きるのか。今回のセミナーの狙いは、この点にある。ライフストーリーの教育への応用は成人教育の領域で進展を見ていると述べたが、この方法は若者にも応用できるのだろうか。あるいはもっと積極的に、どうしたら応用できるのかを考え合いたいのである。本来、高校や大学の若者が自分について語るという場面は、様々な場所に自然に存在しているはずである。しかし若者の生活時間が過密になった上にSNSなど、新たなコミュニケーションの場が彼らの生活を多い支配するようになった今日、「語り合う」という行為は極端に少なくなってしまっている。今回は若者だけでなく、教職員や一般の成人が語るという行為を取り戻す必要性や可能性を探求したい。したがってそれは単に語るという語り手側の問題だけではなく、聴くという聞き手の問題をも重要視する。「精細化」という経験を細かく呼び戻す方法は、このような聞き手と語り手の双方が向き合うための手助けに他ならない。

午前の部：「若者にとってのライフストーリー学習の意味」

エルヴェ・ブルトン

フランス語圏における、ライフストーリー教育および教育への伝記的手法の応用にはさまざまな流れが存在するが、1985年から2007年までトゥール大学の教授を務め同大学の教育・成人教育学科を創設した、ガストン・ピノー（Gaston Pineau）によって開発された方法は独特の位置を占めている。というのは、人生の物語つまり成人の形成過程と経験的な知識の再認識を結びつけることを深く考察しテーマとし確立したことが、ガストン・ピノーの開発した方法の特徴のひとつになっているからである。これらの業績は、自己教育（autoformation）および自己指導（auto-orientation）という課題への取組の中で、はっきりとした形をとってきた。同様に彼の取組は、若い成人への伴走（accompagnement）という実践——学びの過程を安定させ青年期から成人期に向かうまでの経験から得た知識を再認識することを目的とするポートフォリオのような取組——においても、活用されている。ライフストーリー成人教育はまた、若い成人が職業訓練施設を卒業し職業の世界に入っていく過程でも、伴走の方法として活用されている。

若い成人を対象とする教育、および成人教育でライフストーリーを活用しようとする場合には、目標、語ろうとする内容のレベル、経験を掘り下げる範囲、物語が語ろうとする時間をはっきりさせるといった手順が求められる。

- **目標（les finalités）**：ライフストーリーが教育の過程として利用される場合には、時間と経験の展開に順序を見出しそこに様々な観点からの意味を見出す——職業的な配慮、職業経験の中で接した現実、この学びを基に目指そうとする未来——という活動が、面談者側に生まれるのを手助けする必要がある。
- **契約（le contrat）**：この取組で期待することと限界を明確にすること——成果は誰のものか、語るべき瞬間の選択、意見交換を受け入れること、物語を語る諸条件、ポートフォリオに取り組んだまとめ——を目的とする。
- **語ろうとする内容のレベル（les niveaux d'implication）**：ここでは、成人としての生活の領域的広がりの中で、経験を掘り下げる範囲を特定する必要がある。別な言い方をすると、語る取組が持つ意味のレベル——家族、職業、教育訓練、個人的な物語などの領域——を決めることが重要である。語ろうとするレベルを選択すること、それは同時に、契約を結ぶという局面に立ち会うということにもなる。
- **経験の物語が扱う時間（les temps de la mise en récit du vécu）**：これは経験から原語へおよび集団の中で語る（la narration au collectif）段階への移行に必要な時間について検討し、それを共に決定する（co-définir）ために必要である。物語の集団的な表現および聴取の在り方も同様に、契約を結ぶ局面において決定される。

湊川短大でのセミナー参加者の皆さんを対象に私が申し上げたいことは、主体性という観点から若い成人にそのライフストーリーを物語る機会を設けようとするこの取組が、とりわけ一体何をしようとするものなのか (l'enjeu)、その効果と限界についての理解を深めてほしいということである。この報告の中では、職業高校および職業訓練センター (Centre de Formation par Alternance ; CFA: 新しい人生創造センター) において取り組んできた、私のアクションリサーチで得た具体的な事例を用いた説明をする予定である。

簡単な文献リスト :

- Boutinet, J.-P. (1998). *L'immaturation de la vie adulte* (成人期の未熟性について) . Paris : PUF.
- Breton, H. (2016). « Configuration de l'expérience et ingénieries du portfolio (経験の構造とポートフォリオ・エンジニアリング) ». Dans B. Savarieau & M. Boissard (dir.), *Le portfolio entre ingénierie et reliance sociale* (エンジニアリングと社会的紐帯の間におけるポートフォリオ) (p. 55-68). Paris : L'Harmattan 所収.
- René Houde (1999). *Les temps de la vie, Le développement psychosocial de l'adulte* (人生の時間、成人の心理的発達) . Québec, Gaétan Morin Éditeur.
- Lainé, A. (2004). *Faire de sa vie une histoire* (人生を物語にする) . Paris : Desclée de Brouwer.
- Pineau, G. (1986). Histoire de vie et reconnaissance des acquis : éléments d'une méthodologie collective et progressive (ライフストーリーと経験の認識——集団的・漸進的方法論の諸要素) . *Éducation Permanente*, n°83-84, 139-146.

午後の部: 「精細化 (l'explicitation) の具体的な方法について」

システム化された観察の下で、学生または教育職員とともに実施する現職訓練の実践から、私は事実と判断を区別することあるいは正確な描写を行うことは馴染むのが難しく、それ自体を学習の対象としなければならないことを理解することになった。

(ピエール・ヴェルメルシュ『精細化の面談』1994)

説明する (expliquer) のではなく精細にする (expliciter) という問題は、描写 (description) を介して知識に関する理論に繋がっている。1994年にピエール・ヴェルメルシュは、最初の著書である『精細化の面談 (EDE)』を刊行した。彼は状況に即した行動についての記述に力点を置きながら、バラバラだったテクニックをまとめるためのマニュアルを呈したのである。彼はジャン・ピアジェの意識化に関する理論、とりわけ行動の前-反省的段階 (la dimension pré-réfléchie) に関する諸著作からの触発を受けていた。精細化という実践は、教育訓練における反省的諸活動への伴走のための方法論として、登場するのである。具体的には教育職員はEDE (精細化面談) において、相談者の自分の仕事に関わる経験に関する反省的取組を導くため、つまり彼らが職業的な場面で得たノウハウを描写する過程に伴走するために、ひとつの実践を自ら発見するのである。EDEを実践するには、4つの段階を区別し学習の目的にする必要がある。

- ある1つの状況の選択：精細化の仕事は、すでに得てきた1つの経験に関する思い出の想起から始まる。この精細化の取組では、次の3つの視点を置くことが必要になる。①誰に関することなのかを言葉で表すこと ②取り上げる瞬間（正確な日時と場所）を特定すること ③いつまで続いた事柄なのかをはっきりさせること、つまり何から始まり何で終わるのかについての、話し手の全体プランの3つである。
- その状況の現前化 (présentification)：「現前化」とは、「その状況が現れるようにする」ということである。実際には精細化という取組は単にある行動を思い出す（その状況の記憶に帰る）ということ以上のものであり、取り上げようとする記憶を経験の在り方そのものが現れるように探究することに他ならない。したがって現前化は、それによって現わされるべき記憶が、新たに、主体の中で生き生きと蘇るような、ダイナミックな過程として理解される必要がある。
- 行動過程の描写：想起と現前化は、経験を遡るという時間的取組として、一連の状況を描写するのに必要な条件である。行動の描写は経験を言葉に置き換えることから始まり、続いて一連の行動の展開の局面にいたる。
- 行動に関する知識の反省と主題化：行動の描写は続いて、行動-知 (savoir-action) のカテゴリー化と順序づけという観点からの、行動過程の主題化という取組に繋がっていく。この主題化という局面は、経験知を再認識すること——それまで金科玉条としてきた公式の知識と結びつけて見直すこと——を図るには好都合な局面である。

成人教育および成人への伴奏という領域で、このような取組はとりわけ教育および成人教育の教職員からの多くの支持を得ている。そのオリジナリティは精細化面談における独特のガイダンス形式に見いだされ、その役割は教示と質問、進行状況の監督を結びつけることを通じて、相談者が取り組んでいる自分の状況についての探究活動を励ますことにある。この実践は、助言者が自分の観点を明確にするとともに相談者が持つ可能性——行動する力を発展させる源——を明らかにするという、二重の伴走過程に立ち会うための姿勢づくりを進めるのである。

簡単な文献リスト：

- Breton, H. (2018, à paraître). Expliciter (精細化). Dictionnaire de sociologie clinique sous la direction de Agnès Vandeveldde-Rougale et Pascal Fugier, Toulouse : ERES.
- Petitmengin C. (2010), La dynamique pré-réfléchie de l'expérience vécue (経験の前 - 反省的ダイナミズム), ALTER, 18, 165-182.
- Vermersch P. (1994), *L'entretien d'explicitation* (精細化の面談), Paris, ESF.

<参考>

ピエール・ヴェルメルシュ『精細化の面談』: amazon.fr での紹介記事より

『精細化の面談』

多くの職業（教員・職業訓練指導員・心理学者…）において、相談者が自ら問題を解決したり誤謬を正したり彼らにその後の対応を助言したりするために、相手の行動を正確に把握する必要が生まれている。しばしば必要とされているのは、対象者が自分の能力を占有するために、自分は何をしたのか、それはどのように行われたのかについて、より深く自覚するのを手助けするということである。本書は、ピエール・ヴェルメルシュによって着想され発展させられた面談技術の基礎を記したものであり、過去の行動を詳しくしかし誘導するのではない仕方——別の言い方では、その行動を言語的に明確にするという仕方——、記述が可能にすることを目的にしている。本書は過去の経験と向き合うための援助というイシューに立ち、相談者が想起の必要を認め過去と向き合うことによって、大げさに言えば過去の経験が蘇って戻ってくるようになるための、ガイダンスを提供することを目指している。精細化の面談とは、相談者の固有の経験に関する描写が可能になることに向けた、注意深い援助、手助け、伴走である。つまりこの技術は聴くための枠組みを用いることによって、相談者が自覚的になるためにつぶさに検討される必要のある事柄、中途半端なままであるためにさらに明確にされるべき事柄、相談者が依拠する基準の表現としてではない形で判断の対象となる事柄を突き止めることを可能にするのである。この方法を用いることは簡単ではあるが、直観ではなく経験の中で発見されるものが重要になる。本書において、著者は精細化面談の基本を提示することによって、すべての領域において、面談者がその手腕を完成するために行動を分析することが出来るようにする、この取組の本当の方法を示している。この技術は個人的な面談においてと同様、集団的な活動場面でも十分に応用可能である。したがってこの書物は、人々の教育訓練、伴走、自立に携わっているすべての者にとって有益である。本書はまた、すべての人間科学研究における（語り手の証言を分析する）主観的研究の資料収集にとっても、十分に役立つはずである。

ピエール・ヴェルメルシュ

ヴェルメルシュは、CNRS (Centre national de la recherche scientifique : 国立科学研究センター) の認知心理学領域の研究者として、一切の活動を展開してきている。彼は当初、ピアジェ理論を借りながら成人の知力に関する研究に従事したが、それが彼を学校教育の教師や成人教育の教育職員を対象とした領域に進出させることになった。彼は研究対象としてふさわしい経験をしてきた人の証言を基にした、主観的研究の方法論を発展させた。精細化という方法論はその普及に伴い、フランスだけでなく国際的に多くの実践家、研究者に受け入れられてきている。

「関西外国語大学での試み」

関西外国語大学 川崎孝生

私は、外国語大学にて語学を中心とした学びを目指している短期大学の学生を対象とした経営学の講義を、担当している。到達目標は、企業活動の目的およびしくみを理解し、社会に出て“働らく”ことに興味を持つことである。また、短期大学部における学びの総括として設定されているゼミに相当する講義では、企業（社会）活動に関する世の中の動きに対して問題意識を持ち、“働らく”ことをテーマにして、学生各自が将来を展望しながらこのテーマについて考察することをねらいとしている。これらは、初めてキャリアをスタートさせるための準備になると考えている。

経営学の講義は、企業活動のしくみ・制度、企業運営、人・組織開発の3つの柱で構成されている。最初の2つは、知識のインプットを中心とした内容となっている。3番目の人・組織開発は、組織行動（Organization Behavior）と呼ばれる分野で、リーダーシップ、モチベーション、キャリアをテーマとして取り上げており、理論的な説明は参考程度にして、過去の経験を振り返ることを元にして、学生一人ひとりが考えるリーダーシップや“やる気”を個人及び周りの人に動機づける術について考えさせている。最後のキャリアをテーマとした講義では、エドガーH・シャイン（2003）が言う自己概念を抛りどころにして議論を進めている。

ひとは、キャリアの進展につれて、はっきりとした自己概念を育んで行く。この自己概念は、ひとが青年時代の経験や教育によって得たあらゆる自己洞察をもとにできあがっている。自己概念は、以下の問いに対するある程度、明示的な答えがその中身に成り立っている。

- 自分の才能、技能、有能な分野はなにか。
- 自分の動機、欲求、人生の目標はなにか。
- 自分の価値観、つまり自分がやっていることを判断する主な基準はなにか。

ゼミに相当する講義では、例えばAI技術の発展、ビッグデータの活用に見られる第4次産業革命、働き方改革、少子高齢化といったトピックスをテーマにして議論する。加えて、自分の強み、働くことをテーマにしてライフストーリーの手法を用いて学習することで、到来する将来においてどのように対峙していくのかを考えさせている。

この2つの講義に共通している部分は、リーダーシップ、モチベーション、キャリア、働くことをテーマにして、これまでの経験を振り返り、そこに自己概念のヒントを見出すことである。

私は40代の前半に末本先生の研究会において、ライフストーリーの手法を用いて、経験した意味を解釈するプロセスを初めて体験した。また、他者の経験に関心を持ち、そこから学びを得るこの手法に興味を覚えた。今、振り返るとこの手法を受容できる姿勢になれたのは、外資系企業への転籍、技術部門から人材育成部門への業務責任が変更された時であり、進む方向に自分を見出せないタイミングにいたことが背景にあると考えている。初めてキャリ

アをスタートさせる“就職”という分岐点は、方向性を模索している学生がライフストーリーを活用する効果的なタイミングではないか。本研究会では、私の授業実践の概要、方法、成果、課題を報告させていただき、皆様から忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

参考文献

エドガーH・シャイン著 『キャリアアンカー』 翻訳 白桃書房, 2003